



お母さん、ありがとう

〈滋賀県〉 水上幸子 みずかみ さちこ 51歳

「母は自宅で見取りたいんです。それが母の希望でしたから」

Yさんは私と医師に向かってそう言った。医者嫌いのYさんのお母さん

は93歳、食道がん末期で日に日に衰弱していったころだった。少しず

つ認知症の症状も始めていた。延命治療はせず、自然に逝かせてあげたいとの希望だった。在宅での介護

はYさんにとつて過酷を極めた。少しでも栄養を取らせてあげたいと、

大好きなものなど工夫して与えた。しかし、すぐに嘔吐してしまう。洗

濯物も増えた。特に、せん妄せんもうになつたお母さんを「なだめるのがつらい」

と言った。Yさんの疲れがピークとなり、ショートステイなどのサービ

スを使う提案をしたが、Yさんは「母

をどこにも行かせたくない」と拒んだ。「喫茶店にコーヒーを飲みに行くのが楽しみだったけど、行けない」とこぼした。

訪問看護師の私は、訪問時にコーヒーを持っていき、「お家カフェ」としてYさんとかの間の時間を過ご

した。Yさんはぼつりぼつりと話し始めた。生まれてすぐにお父さんが

戦地で亡くなったこと。母一人子一人で苦労したこと。結婚して家を出

たが、離婚して子どもを連れて帰ってきてお母さんに自分の子どもたち

を育ててもらったこと。「母はずっと働き詰めの人生だった」。

6月のある日、お母さんはYさんや遠方にいるお孫さんたちに囲まれて眠るよう天国に逝った。亡くなら

れた後Yさんは言った。「私一人では看取れなかった。私は忙しかった母に抱き締められた記憶がありません。でも、介護しているうちに私が母を抱き締められるようになりました。これからは自分の子どもたちを抱き締めていこうと思います」。後日、私はYさんから聞いた話や介護での出来事を物語にしてお渡しした。2年たったある日、Yさんから連絡があった。絵心のあるYさんは物語に挿絵を入れて手作りの絵本にした。物語の最後にはこう締めくくられていた。「お母さん、ありがとう。生んでくれてありがとう」

